

文学部 比較文化学科
小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に8ページあり、解答用紙は4枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題 I 次の英文を読んで、以下の設問に答えなさい。

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

(Adapted from Suzanne Zimble, “The Homework Debate,” *TIME for Kids*)

(注) *Marion County, Florida : フロリダ州 マリオン郡

*Massachusetts : マサチューセッツ州

- 問1 下線部（1）の **Now Dara's only homework is to read for 30 minutes.** という状況が生じたのはなぜですか。本文に即して 100 字以内の日本語で説明しなさい。（15 点）
- 問2 下線部（2） **Paula Fass** の指摘について、本文に即して 120 字以内の日本語で説明しなさい。（15 点）
- 問3 下線部（3） **Harris Cooper** の見解について、本文に即して 200 字以内の日本語で説明しなさい。（20 点）
- 問4 下線部（4）に **to experiment with its policies** とありますが、その具体的な内容は、**Kelly Elementary School** においては、どのようなものですか。**its policies** が採用された理由の詳細も含めて、本文に即して 200 字以内の日本語で説明しなさい。（20 点）
- 問5 下線部（5）の **conflict over homework** について、あなたはどのように考えますか。自分自身の経験も交えつつ、あなたの意見を英語で述べなさい。（30 点）

問題Ⅱ 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

とにかく今の日本は「うさぎ人気」である。これは、その年の干支が「卯年」であるかどうかは、全く関係のない現象である——そう聞いて、「えっ、本当にそう？」と訝（いぶか）る方がいれば、是非知って欲しい話題がある。

近年さまざまなオフ会が開催されているが、その一つにテレビ報道でもたびたび取り上げられている、兎（うさぎ）愛好者たちのオフ会「うさんぽ会」がある。「うさんぽ」とは、「うさぎ」と「おさんぽ」のことばを合わせた造語。2009年3月に行われた第1回「うさんぽ会」以来急速に会員数を増やし、2011年3月末時点では5千人、2012年12月現在では約1万人にまで上るといふ。主催者側の発表ではあるが、これは実に驚くべき数であろう。

こうした会員の男女比の内訳や年代層の詳細は不明であるが、状況の背景には、都会でマンション暮らしをする人たちが増え、そうした人々の間で集合住宅でも飼うことが可能なペットとして、ウサギを選ぶ人たちが増えたためとの見方もある。また一説に、会員にはIT関連の職業に関わる人が多いとも言われており、パソコンのような無機質なものに疲れた心を癒す「フラフイーペット」（フラフイーとは、ふわふわしたものを触ることで気持ちが和らぐことを言う）として、ウサギの手触りが最適であることも関係しているのではないかと見方もある。

東京（於代々木公園）ではこれまで22回の「うさんぽ会」が開催（2012年12月現在）されており、愛好者たちがご自慢のペットの「かわゆい」ウサギたちを持ち寄り、互いに「子誉め」をし、ウサギのポートレート写真撮影会（あたかも美少女アイドルを撮影する「撮影会」に似ている）なども行い、懇親を深めている。

こうした愛好者がネットワークを持つことにより、例えば「猫カフェ」のように、飲食をしながらペットと触れ合うことが可能な空間を、ウサギの場合でも多く増やしたいという。このような喫茶店は一般に「うさぎカフェ」と称されるが、2012年現在では東京や大阪、名古屋を中心に全国に11店舗存在するといふ、確かに着実に「うさぎマニア」の人々が増えつつある状況を示している。

また「うさんぽ会」自体も、東京以外の大阪、岡山、福岡、高知などでも開催されるようになっており、次第にその輪が全国的に展開し始めている。

だが「うさんぽ会」のような流行現象ではなくても、日本には伝統的に「うさぎブーム」がそもそも存在するのだ——と言ったら、それは言い過ぎであろうか。なぜなら、例えば少女たちだけでなく、なぜか老若の日本女性たちが好んで身に付けるバッグや小物、ハンカチやTシャツなどには、さりげなくうさぎをモチーフとしたデザインが何処にでも溢れている。それは別に声高に叫ばなくても、あまりに「自然な」光景なので、普段の生活の中でとりわけ注視する人はほとんどいないだろう。

実は私がこれまでも複数の留学生たちから聞かされてきた話なのだが、例えばお隣の韓国では、主に子ども向けのキャラクター化された兎デザインのグッズなどは別として、日本の和風小物のように大人の、とくに女性向けにデザインされた可愛らしい「うさぎ柄の小物」などは、^巷ではほとんど見かけないと言う。それに対し日本では、陶磁器や衣類、雑貨や小物だけではない。和・洋とも菓子屋の店先でも、日本はうさぎで溢れている。また、製パンメーカー「フジパン」の販売促進キャラクターには、長年「ミッフィー」が採用されているし、あるいはキューピー株式会社製のマヨネーズのCMでは、イギリスのあの名作絵本「ピーターラビット」がアニメーションとなって流れ（1980年登場）、消費者は思わず「かわいい！」とテレビに目を奪われる。

このように、いつの頃からか日本には潜在的あるいは日常的な「うさぎブーム」が存在し、それが現代日本の生活・文化にもしっかりと定着していることは、もはや明白なのである。

さて6年ほど前のことになるが、児童文学の研究者のみならず、コアなうさぎファンたちにとっても、ちょっとした驚きのニュースが新聞・テレビで流れた。それはビアトリクス・ポター著『ピーターラビットのおはなし』の世界初の翻訳が、何と日本語であったという事実が判明したことである。

『読売新聞』2007年5月9日付夕刊によると、大東文化大学教授・河野芳英氏およびポター愛好者の小林和子、利部由理子氏らの研究グループは、『日本農業雑誌』第2巻第3号（明治39年〈1906〉11月）に「松川二郎」なる人物の署名で「お伽小説 悪戯な小兎」と題する絵入りの文章が掲載されていることを報告し、これが紛れもなくビアトリクス・ポター著『ピーターラビットのおはなし』の日本語による翻訳であることを発見した。従来では『ピーターラビットのおはなし』の最も早い翻訳は1912

年刊のオランダ語版であるとされてきたので、それよりも日本語版は6年も早かったことが明らかである。河野氏は「出典は書かれていないが、原作のストーリーをほぼ正確に伝えている」として、研究者の国際学術団体「ビートルクス・ポター協会」にも報告を行った——というものである。

ところで、『ピーターラビットのおはなし』であるが、この絵本は1901年に著者のビートルクス・ポターによって自費出版され、翌1902年にフレデリック・ウォーン社から出版されている。元は1893年9月に著者のポターが、かつて自分の家庭教師であった女性の息子・ノエル君に宛てた手書きの絵手紙がきっかけで、4匹の子ウサギ兄弟のお話が原型である。『ピーターラビットのおはなし』を含むピーターラビット絵本シリーズは世界各国で翻訳され、日本では現在福音館書店版（石井桃子訳）が一般的に広く愛読されている。

さて、話を再び現代に戻そう。日本人の兎好きを物語る現象の一つに、全国各地に兎に因む神社が多数あることがあげられる。こうした神社の数々は「うさぎ神社」、また最近では「うさぎパワースポット」などと称され、その多くが参拝すると子宝や安産、縁結びに御利益があると謳われていることが少なくない。

例えば京都市左京区岡崎の岡崎神社（東天王社）は、古くは平安京遷都の際に王城鎮護の役割を担ったことから、方除厄除神、産土神として付近の氏子や信者たちからの信仰を集めてきた。かつて岡崎村あたり一帯は野兎が多く棲息していたため、東天王社では兎を氏神の遣いと見倣していた。また御祭神である素戔嗚尊と奇稲田姫命が三女五男の八柱神を儲けられたこと、さらに兎が多産な動物であることから、東天王社は「子授け」に御利益があると信じられ、高倉天皇（在位1168～1180）が中宮のお産の際には奉獻を賜ったことから「安産」の神としても信仰されるようになった。現在でも岡崎神社は「子授かり・安産」の神様として、平日でも多くの参拝者が訪れている。

現在の岡崎神社の境内には、狛犬ならぬ「狛兎」をはじめあちこちに兎のかたちを発見することができ、「うさぎ好き」のファンにはたまらなく楽しいパワースポットとなっているようだ。とくに社務所で授けられるお守りや絵馬、また兎のかたちをした素焼きの土人形の「うさぎおみくじ」など、ご神紋として掲げられている兎のかたち以外はどれも現代的な図像であり、いわゆる「かわいい」兎のかたちで参拝者に人気

が高い。いまや岡崎神社は「うさぎ好き」の人々にとって、必ず参拝すべきメッカのようにも言われている。

ちなみに東天王社のご神紋は、いわゆる「跳ね兔」の形である。しかし通常跳ねた兔と組み合わせに用いる波文様が岡崎神社のご神紋にはなく、跳ねた兔の形が単体で表されている点が興味深い。いずれにしても、こうした神紋としての兔のかたちや表情は決して「かわいい」ものではなく、もはやグッズ化しているお守や絵馬、おみくじにデザインされた兔のかたちとの違いが鮮明である。岡崎神社のご神紋がいつの頃より用いられてきたのかは不明であるが、決して「かわいい」と感じさせる造形ではない故に、より神聖な対象として兔を見做していたであろう「古^{イニシエ}びとのまなざしを、看取することができるのである。

兔をめぐるさまざまな「かたち」は今日の日本に、もはや文化として根付いていると言える。そして、多くの人がある状況に至極当たり前のことと受け止め、とりわけ「本来の形」や「意味」を注視することはない。ましてや現代では、「キャラクター化された兔」のイメージが先行し、日本独自に歴史的に継承されてきた兔のかたちが、それらによって実に浸食されていることが少なくないのである。さらに、現代日本における「うさぎキャラクター」といえば、ほとんど誰もがピーターラビットやミッフィーをまず挙げるが、これらは西欧から移入されたものであり、ピーターラビットですら日本に根付いてから、まだ一世紀ほどでしかない。そして、兔を「かわいい」と見做す日本人の感覚が、実はきわめて「現代的」なものであり、しかもアジア地域でも「日本だけ」というきわめて特殊な事例であることに、日本人が無自覚であるという点も、改めて浮き彫りにされてくるのである。

古より兔をめぐる長い時をかけて育まれてきた古典的形象や伝統認識——つまり兔が「月」の象徴であり、そこから派生する「神」やその遣いとして見做されてきたこと、あるいは、兔の長い耳や力強く跳ねる足に「異形の神」としての霊力を見出し、例えば戦国時代の武士たちが、それを崇める意味で武具の装飾に用いてきたことなど、多くの美術・工芸品や古典文学の世界で、伝統的に取り上げられてきた（兔表象）を見れば、一目瞭然の日本独自の世界観がそこにはある。

現代日本人の意識の中でも、こうした兔への愛着や土着的な信仰は、「伝統」の部分を残しながらも、時代の流れの中で確実に変わりつつある。

(今橋理子『兎とかたちの日本文化』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

問1 下線部について、本文中で述べられている現代の例やそれ以前の例を幾つか挙げながら 350 字以内で説明しなさい。(50 点)

問2 日本における兎の例のように、時代の流れの中で姿・形が変化したものを挙げ、その変化の内容や背景について 400 字以内で具体的に説明しなさい。ただし、取り上げる事例は、近現代以前と以後とで変化したものでなくても構わない。
(50 点)